

など所によりてさまざまに稱よし、大倭本草十二卷物類稱呼三卷倭漢三才圖會八十二卷本草啓蒙廿卷に見ゆ、伊豆國にては古我多比コガタビとよびて、葉は舶來肉桂に似て、末小尖り、表裏共に色つや、かなり、實は紫葛クマツヅラの實紫葛關東にてカより小し大きくて、三四五顆房をなして結り、初は青色、熟れば濃紫色なり、中に天瓜核テンカネの貌なる核あるよし、門人藤井昌榮伊豆三島神主いへり、さて多万乃木マンノキとは實の圓にて玉に似たる故の名也、陀母多夫タモトフ、多菩タフは通音也、久須陀毛クスマは香玉カサギにて、香きよしなり、玉久左玉タマクサ、玉我良タマカラ、加良陀毛カラタモなども玉のよしある名なり、古我多比コガタビも小香玉の通音にて、古コと小コと通ふずしは、余已に佐野渡の注釋にいひたり、又此木の一種に、葉末尖らず、裏に白毛ありて、實胡頹子コハシロばかりなるが、十顆或は二三十顆附合て結り、初は青色、熟れば赤きものあり、白陀母シロタモ、白多夫シロタフ、裏白都豆シロツブ、乃木油ノキアブラ、木須々キノキス、便伊ベイ、白都豆シロツブ、乎支コノキ、乃三ノミ、乃木ノキ、阿加多比アカタビなどよぶ、乎支コノキ、乃三ノミ、乃木ノキといふは、小香の實の木の心也、阿加多比アカタビは赤玉の通音にて、實の赤ければ也、白陀母シロタモ、白多夫シロタフ、白都豆シロツブ、裏白などは、葉裏の白色によれるなり、又大多比オホタビとて、葉いとおほきく、裏小白く、古我多比コガタビよりも大なる實二顆許房をなして結り、初青色、熟後濃紫色なるがあり、古我多比コガタビより下品、白多夫シロタフよりは上品のよし、藤井昌榮いへり、大多比オホタビといふは、葉も實も大なるによれる名也、かく一種にて形状異なるは、松に男松、女松、姫松、榲シに白榲赤榲などあるがごとし、

〔佐渡志五物産〕月桂 方言ダモ

實ヲムスブコト、南天燭ヨリ大ナリ、

〔新撰字鏡草〕葎止毛久佐、又安知左井、

〔倭名類聚抄二十〕紫陽花 白氏文集律詩云、紫陽花和名阿豆佐爲

〔倭訓栞阿中編一〕あぢさゐ 新撰字鏡に見ゆ、万葉集に味狭藍とかける味はほむる詞、狭藍は花の色をいふ也、倭名抄には紫陽花あづさゐとみゆ、白氏文集を引り、南部新書に、招賢寺僧植桂、香紫